



認知症患者さんとご近所「さんぽ」で
症状の改善を目指した薬剤師

京都市内にあるゆう薬局の管理薬剤師Fさんは新卒で入社22年のベテランです。自身が小児喘息で幾度か入院を経験。そのとき病院で医師を支える姿がかつこよく見えたことから、薬剤師が将来の夢になりました。ゆう薬局を選んだのは、1人ひとりの患者さんと信頼で結ばれる「かかりつけ薬剤師」の姿に憧れたからです。

多くの患者さんと出合ってきたFさん。とりわけ印象に残るのが、認知症で80代の梶さん（仮）です。夫とふたり暮らしの梶さんは、自分で服薬ができないほど重度の認知症でした。地域包括支援センターから「落ち着くまで毎週梶さん宅を訪問してほしい」との要請を受けたFさん。梶さんに明るく声をかけ、看護師やヘルパーなどの訪問スタッフに日替わりで服薬補助を頼み、梶さんの様子を共有。引きこもりがちな梶さんを外に連れ出そうと「僕とさんぼしませんか」と何度も誘います。「フラれ続けました」と笑うFさんは当時30歳でした。

高齢になると温度に対する感覚が弱まり、

真夏でも厚着をして熱中症になる危険も。

そんな生活面のケアにも目を配り、Fさんが温かい声をかけ続けた結果でしよう、ついにさんぽをOKしてもらいます。梶さんと手をつなぎ、家の近くの河川敷へ。わずかな時間でしたが、梶さんの見せた和やかな表情が忘れられない、とFさんは言います。

「出不精になるのも認知症の特徴のひとつ。社会性がなくなり、表情も少なくなる。外出して日にあたり、外の刺激を受けることは改善の助けになるんです」。

薬剤師は患者さんの日常を見守り、ときにはマニキュアルにとらわれない対応で症状の改善を目指すことも必要と話すFさん診ていた患者さんが引っこ越しすると、転院先に服薬状況をレポートにまとめて提供する薬剤師もいます。「そこまでやってくれるのか」と感激した患者さんもあるそう。

ゆう薬局の薬剤師が目指すのは、患者さんや家族、地域の笑顔を増やすこと。Fさんはその心や思いを、後輩や新人指導の場でも今も伝え続けています。



ゆう薬局グループ本部・
宇野薬局

☎075-771-1690(本部)
📍京都市左京区浄土寺下
馬場町106

もよりバス停は「錦林車庫前」